



紹介者

石井 裕樹

YCPホールディングス
取締役兼グループCEO

上野山 勝也

PKSHA Technology
代表取締役



AIが変える、つながり

「♪今週もみんなお疲れさま！ 今週のパークシャ（弊社）は…♪」

金曜日の午後、弊社では毎週、「AIが自ら作成した3分のラジオ」が社内に流れる。
元となるデータは社員の会話データだ。

「営業二部の鈴木さんが、お客さまにこんなことを言われたよ。すごいね〜♪」

若手の社員たちは、自分のことがピックアップされると喜んだり、滑稽なAIの感想を評したりしている。経営者である自分が知らなかった、社内の様子がAIにより要約され、私の耳に届く。生成AIにより、社内コミュニケーションの形が変わりつつある。

このような実践を通じ、さまざまな可能性と疑念が脳を駆け巡る。AIを使えばもっと多くの社員と会話することは可能か？ 日々、役員から受ける社内報告は、本当に社内を表しているのか？ 自分の認知の限界が、社員や会社の可能性を狭めてやしないか？ なぜ、そもそも、弊社の組織はピラミッドの形なのだろうか？

AIには人間のような認知限界はなく、社内を自在に泳ぎ回り、コミュニケーションデータを収集する。よくよく考えると会社や社会の形、そして「つながり」の形は人間の認知の形に、規定されていることに気付く。人間の認知制約を拡張し得るAIの誕生は、群れをなす人間である私たちに何をもたらすのだろうか。

私が窓際に佇んであれこれ妄想している中、社員たちは次々とオフィスを後にし、夜の街に溶けていく。気のせいかな、社員同士は心無しか昔より仲が良いように見える。

この風景は、10年後にはどう変わっているのだろうか。AIと人間が織りなす新しい組織・群れ・つながりの形。志を同じくする「同友」の存在。それは、私たちの認知を超えた形なのかもしれない。

「♪今週もみんなお疲れさま！ 今週の業界ニュースだよ…♪」

今週もまた、金曜の午後、AIの声が社内に響き渡る。

▶▶ 次回リレートーク

大野 誠

インテル
取締役社長